



国登録有形文化財の今井家住宅がシンボリック的存在に！

平成26年度に国の登録有形文化財に登録された今井家住宅ですが、その後、今井家を見学の主体としたまちあるきのコースが設定され、また関係講演会が開かれるなど、多くの市民の皆さんに注目される人気スポットとなっています。

戦後、家庭薬事業などを手がけ吉田地域の発展をけん引した今井家ですが、敷地の中に江戸時代から昭和にかけての建造物が残っており、特に「香林堂」と記された赤レンガの西洋館は当時から人々の目を惹き、吉田地域のシンボリックな存在でした。



赤いレンガ造りがひととき目立つ西洋館

(写真提供：今井家)

当時より人々の目を惹いていた赤レンガ造りの西洋館をはじめとした今井家の建造物ですが、国の登録有形文化財の登録という新たなスポットライトがあてられたことで、より一層市民の皆さんからの注目を集め、今まで以上に吉田地域になくしてはならないシンボリックな存在感を示すこととなりました。

吉田地区まちづくり協議会の主催で6月に行われた今井家住宅をテーマとした講演会には、100名を超える皆さんが駆けつけるにぎわいとなり、また10月から11月にかけて企画された見学ツアーでは、毎回10人以上の皆さんが参加し人気のツアーコースとなり、ここからも皆さんの関心の高さがうかがえます。

通常は個人での見学などは不可能な非公開である今井家の建造物ですが、来年度も各地区のまちづくり協議会などが主催するまちあるきのコースには今井家を見学できるコースも計画されているようです。文化財を有効に活用する見本のような展開を見せている今井家建造物の現状ですが、今後も有効な活用に期待がかけるところです。

平成27年度 燕市の主な文化財保護事業

燕市教育委員会では、市内の文化財を守り後世に伝えていくため、さまざまな取り組みをしています。その事業の中から経過、成果をいくつかご紹介します。

●長善館史料館所蔵資料調査（筑波大学連携事業）

長善館は、天保4年（1833）～明治45年（1912）まで粟生津にあった私塾で、80

年間に千人を超える塾生を教育しました。長善館は「越後の松下村塾」と言われるほどさまざまな人材を輩出した私塾です。

燕市では、平成 25 年度から筑波大学の中野目教授ゼミと連携して史料館に残る長善館資料を整理・調査しています。今年度も引き続き筑波大学連携事業として調査を行いました。7月に事業の中間報告会として、中野目教授による講演会を開催しました。「記録を残す」ことの重要性、またそれをどう活かしていくかがさらに大切であるという教授の説明に出席者は聞き入っていました。中間報告会ということであり、市の職員を対象とした報告会だったため一般の方の参加はありませんでしたが、まずは行政の中で「記録を残す」ことの意味を再認識し、さらに有効な活用方法を模索していく必要があるという貴重な提言をいただきました。

また 10 月 1 日（木）～3 日（土）の 3 日間、教授・大学生ら 27 人で、前年度データ化した資料原本の確認作業や掛軸の整理カードの記入作業を行いました。作業の内容も終盤に近く、また資料の数も膨大なため、参加大学生たちは、休む間もなく時間に追われながらも丁寧に資料を扱い、作業を進めていました。



中間報告会



学生たちの作業

●地蔵堂本町屋台修復作業

例年「分水まつり」で飾られている地蔵堂本町屋台ですが、今年度、まつりの期間中の深夜に自動車との衝突事故があり、一部破損がありました。

幸い自動車の運転手は軽症ですみましたが、衝突した影響でいくつかの破損が見られました。そのため教育委員会では、屋台の復元を行った業者に委託し、破損部分を修復する作業を行っています。

修復作業については、詳細な破損状況を把握するため解体調査を行ってから事故前の屋台の強度を保つような方法を検討し、修復方法を採用しました。来年度の「分水まつり」までには作業も終了し、お祭り広場ではいつもと同じ屋台の姿を見ることができそうです。



屋台の破損状況



解体調査

●県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査（10月～12月）

県営経営体育成基盤整備事業（本町地区）の実施に伴い、事業地内の遺跡の有無や内容を確認するため、試掘調査を実施しました。

この調査は、平成26年度に行った同地区での試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財の存在を把握するに不十分だった西川沿いの範囲について再度試掘調査を行ったものです。

昨年度の調査では、現在の本町集落の南側の範囲を中心に鎌倉から室町時代にかけての生活遺構や道具が見つかりました。井戸跡や柱穴など生活に密着する遺構、出土品では日常的に使用する土器や漁具に加えて輸入品である青磁や鍛冶に関する遺物も見つかりましたが、今年度の調査範囲では新たな遺構や遺物の出土は確認できませんでした。したがってこの範囲には鎌倉から室町時代の遺跡は広がっておらず、昨年度調査で遺跡が確認できた現在の本町集落からその南側を中心とした範囲に鎌倉から室町時代の集落の本体が存在したと考えられます。

今後はこの調査結果をもとに、事業の工事計画と照らし合わせ、見つかった遺跡の取扱いを協議していくこととなります。



試掘調査の様子

●燕市遺跡出土品展「平成27年度発掘調査速報」（来場者数：171人）

平成28年3月5日～3月6日、これまでの遺跡調査成果を紹介するとともに地域の歴史について知っていただくため、燕市遺跡出土品展を燕市中央公民館で開催しました。

今回は先にご紹介した県営経営体育成基盤整備事業（本町地区）において、実際に試掘・確認調査で出土した鎌倉時代から室町時代の遺物、それに合わせ吉田地区の北部で同じように鎌倉から室町時代の遺跡として発掘調査を行った「北小脇遺跡」及び「館屋敷遺跡」の出土品を中心に、鎌倉から室町時代にスポットを当てた展示を行いました。

会場には当時の製品を実感してもらえるように、実際に出土した土器や石製品に触れられるコーナーを設けました。出土品を手にしながらかさや文様などを注意深く観察する人も多く、実物展示の有効性を実感しました。

また下駄や櫛といった生活用具や錐や木づちといった工具など古い遺跡からの出土品とはいえ、私たちが現代の生活において使用している道具とほぼ変わりのない形をした出土品を展示したことから、遺跡に対する意識も身近に感じられたようで、市民の皆さんの地域史への関心の向上につながった展示となりました。



展示の様子

燕市の文化財紹介

● 燕市指定文化財（建造物）「諏訪神社」

諏訪神社は燕市吉田上町に鎮座しています。創立年代は不明ですが、古くから吉田周辺の産土（うぶすな）神として信仰されてきました。元禄9年（1696）に大保権現、神明社、諏訪宮が合祀されて社殿が現在地に造営されました。なお現在の本殿、拝殿等は文政7年（1824）から同13年（1830）にかけて間瀬大工の棟梁等により再建されたものといわれています。

建物は総ケヤキ造りで、建設当時の姿をよく残していると考えられています。特筆すべきはその彫刻で、永年の風雨にさらされ損傷が目立つ部分もありますが、間瀬大工のもつ最高技術を積み重ねて造形された彫刻を全体的に配しています。そのため多くの彫刻を配置する事を重要視していた江戸時代末期の代表的作品とされ、近郷近在の神社建築の手本としての存在価値を有していたと思われます。



神社正面から



間瀬大工による芸術的な彫刻

18世紀から19世紀にかけては江戸時代初頭に建築された社寺の修復・再建が全国各地で本格化した時期です。諏訪神社の再建も例外ではありませんでした。その再建にはこの地域の優れた経済力と間瀬の大工集団の優れた技術力が如実に表現されました。また境内には大小様々な石灯籠が奉納されており、地域の人々の信仰の深さをうかがい知ることができます。このように地域の人々の思いと優れたチカラによって作り上げられた技術の結晶が永く引き継がれていくことは極めて自然なカタチといえるのかもしれません。